Area News
Topics

City Life NEWS

全国で注目される施策や課題は、地域で暮らす私たちにどう影響するのか？身近に起きた出来事やトレンドなど、幅広い分野のニュースを紹介していきます。ネットでもさまざまなニュースを紹介しています。

シティライフNEWS
で検索

（上）岡町第2農園の様子。取材時はいちごを栽培。
（左）阪急岡町駅近くにある岡町農園。住宅地にあるため、害虫や匂い対策をしっかりと。足場はレンガを置き、スタイリッシュに仕上げている。

MONTHLY OF TOPICS

定年男性の地域デビューのきっかけに 都市型農業に取り組む「豊中あぐり」

豊中市社会福祉協議会 福祉推進室
室長 勝部麗子さん

大阪府豊中市生まれ。1987年に豊中市社会福祉協議会に入職。2004年に全国で第一号のコミュニティソーシャルワーカーとして、地域住民の力を集めながら様々な取り組みを行っている。

豊中のまちづくりを担う 団塊の世代との取り組み

豊中市社会福祉協議会でコミュニティソーシャルワーカーとして活躍する勝部麗子さん。コミュニティソーシャルワーカーとは、生活が困難な家庭など、支援を必要としている人や地域に対し、援助を通して地域と人とを結び付けたり、生活支援や公的支援制度の活用を調整するための専門職。勝部さんは2004年に日本初のコミュニティソーシャルワーカーとなって以来、様々な支援を行っている。

取り組んでいる活動の一つに、定年男性だけが参加できるコミュニティがある。定年男性は地域から孤立しがちで、全国の都市部での課題にもなっている。豊中市も千里ニュータウンができて50年が過ぎ、定年を迎える男性が増えているという。「定年男性の孤立は、孤独死やアルコール依存などさまざまな問題につながることもあります」と勝部さん。またそれとは別に、豊中市は農地が少ないため農業の先細りが懸念されている。そこで勝部さんは、定年後の男性に農業を通して地域との関わりを持ってもらうことを思い立った。2016年、宅地を耕し収穫や販売、地産地消イベントにも参加する都市型農業のコミュニティ「豊中あぐり」を立ち上げた。

地域活動のギャップに戸惑う

しかし、思わぬ壁に直面してしまう。「効率を重視し指示命令系統のない活動に戸惑ったり、企業勤めの感覚が抜けない方もいました」。参加者たちは、多くの時間を企業で過ごしてきたが、地域活動は企業での働き方とは違う。そこで勝部さんは率先してコミュニケーションの橋渡し役を務めることにした。すると少しずつメンバーが足並みをそろえ、互いを支え合う体制に変化していった。「名刺を作ったり、それぞれの得意分野の仕事を割り振ったりしながら競争社会で生きてきた人を共生社会に取り戻す試みが続きました」。

豊中あぐりから 地域デビューを目指して

農業未経験者ばかりだったにもかかわらずそれぞれが工夫を凝らし、米やジャガイモなどを栽培していく中で、参加者は次第に農業に没頭していったという。2018年から参加している平野恭介さんは「妻に紹介されて参加しました。野菜づくりははじめてですが、どうすれば上手く育てられるか仲間と一緒に調べたり、考えたりするのは良い刺激になります」。今では豊中あぐりが生活の中心になっているそうだ。

「収穫した作物を料理し販売することが喜びになり、また、その中で地域の方々と繋がることが生きがいになっているはずです。活動を通して、社会に参加するきっかけを作ることができれば何よりです」。勝部さんは「豊中あぐり」という場で、定年男性の新たな道を見出し、なおかつその力を豊中のまちづくりにも活かしているのだ。

芋焼酎
「豊中あぐり」
菜園で収穫したさつまいもを焼酎に。会員拡大のツールに使われている。

豊中あぐりのメンバーとして活動する平野恭介さん。今では家庭菜園をするほど野菜づくりが趣味に。

CULTURE

池田の魅力を広めたい 映画「池田に風カヲル」が今夏公開予定

今夏、池田市内で短編時代劇映画「池田に風カヲル」が封切られる予定だ。舞台は室町時代、摂津池田に織田信長の軍勢が迫る中、池田軍の影で甲賀忍者が活躍していた――というストーリーだ。池田市城山町の一部は、1944年に合併されるまで「甲ケ谷町」という集落で、元は「甲賀谷町」と呼ばれていた。「史料によると町中に池田城家老の「伊賀屋敷」があったと記されていた」という。「甲賀」に「伊賀」といずれも”忍者”を連想させるキーワードだ。忍者が活躍した戦国時代、池田は忍者と関わりがあったのかもしれない――。そんなロマンをスクリーン上で叶えた映画「池田に風カヲル」が、いけだ市民文化振興財団と甲賀市の協力の元、企画の趣旨に賛同した池田の町を愛する人たちで制作された。監督は、池田で歯科を営みながら、自身のスタジオで時代劇ワークショップを開いている「プロジェクト斬」の代表・大内千里さんだ。

大内さんの師匠は、テレビドラマ「水戸黄門」で有名な故・井上泰治監督だ。ワークショップに毎回足を運んで指導し、池田を舞台にした映画制作を勧めたのも井上監督。昨年末に亡くなる直前まで、この映画のアドバイザーとして大内さんへエールを送っていた。

大内さんは「『ダメなものはつくるな』という井上監督の言葉通り、衣装・カツラ・効果音など全てをこだわり抜いた」と感慨深く語る。「殺陣は芝居」という教えが活かされた殺陣のシーンはかなり見応えがある。

脚本も手掛け、出演もされている大内千里監督。

今回の映画が5作目となる大内さんは、常に「人間が一番愛おしい」をテーマにしている。「忍者も一人の人間として生きている」ことを表現するため、必ず「食」のシーンを入れるという。「生きるには食が必要でしょ?そのためには歯が必要。だから私の本業は歯科医なんです」と大内さんは笑顔で語る。脚本も役者自身の個性から物語を生み出し、決して代役は立てなかった。だから役者それぞれが役柄に誇りを持ち、生き生きとしているそうだ。大内さんの人を大切にする姿勢に惹かれ、撮影チームが誰一人欠ける事なく増え続けているのも納得である。

「この映画を通して、池田に歴史があること、池田の時代を作ってきた人達を知ってほしい」。人を、そして時代劇を撮り続けたいと願う大内さんと、一緒に池田を盛り上げたい撮影チームは、そんな想いをこの映画に託す。

池田市民文化会館「アゼリアホール」（池田市天神1）や、ロケ地となった甲賀市での上映と、映画祭出展も計画中である。

※コロナの状況によって予定変更の可能性あり。